

『月刊 島民』終刊

大阪の図書館などで『月刊島民』というフリーマガジンを読んで、あらためて中之島の歴史と魅力に魅せられた。毎日 24 日夕刊に「島民終刊」が大きく伝えられていた。「島民終刊」ではなく、「島民冬眠」と思いたくなる。抜粋して紹介する。

大阪・中之島かいわいをあらゆる角度から掘り下げてきたフリーマガジン「島民」が、3月発行の136号をもって終止符を打った。

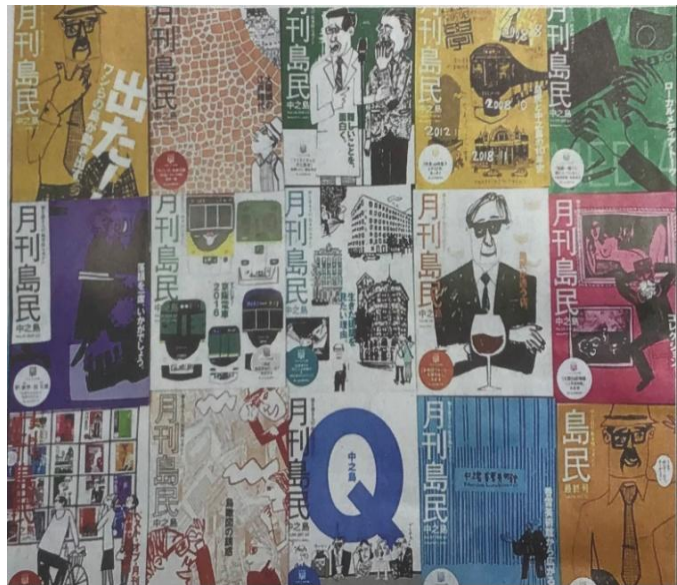
「島民」は、京阪中之島線の開業に合わせて2008年8月に月刊誌として発刊。当初は半年の予定だったが、好評につき半年延び、1年延びしてとうとう12年。編集・発行を担ってきた「140B」社の大迫力さんは、これだけ続いた要因に、「中之島の厚み」を挙げる。「食べたり飲んだり買い物したり、というエリアではない。逆に、アート、建築など中之島を形作るものならなんでもあり。ネタに困ることはなかった」と話す。

ざっと特集のタイトルを列挙すると「もっと人生に公会堂を」「天神祭の歩き方」「すごいぞ！懐徳堂」「中之島は宝島だ！」「手塚治虫が歩いた道」「島民とウイスキー」などなど、実に多岐にわたる。

「島民」というネーミングも秀逸だった。中洲の中之島を島と意識していた人はいなかったのではないだろうか。「大企業も美術館などの施設もあるけど、横のつながりがなかった」（大迫さん）という中之島を、「島民」のコンセプトが横串を刺すようにつないだのだ。

当初2万5000部だった発行部数は4万5000部に。部数を増やしながらの発行終了を、大迫さんは「役割を終えた」と説明。

表紙イラストは奈路道程さん。奈路さんは、変わらないモノがいっぱいある中之島を描くに当たって「シブくいこう」と決めた、と振り返る。「建物の柱は材質がほかと違ったり、石でできたものが多かったり。梅田が近代的になって、コントラストが



できてきた」と観察。人もそうだ。「中之島の年配の会社員は、帽子かぶったり背広が毛織りでズボンは大めだったり」。そんなイメージで創刊号のオジサンを描いた。最終号では、同じオジサンがピースサインをしている。遊び心にクスッとくる。

(2021年5月1日)